

実践報告(Report)

「戸外アートコーナー」を中心とした子ども主導の制作活動の展開

Development of children-led production activities centering on “outdoor art corner”

山田 祥世*・中村 規代*・石橋 尚子**・飯田 恵***
YAMADA, Sachiyo* NAKAMURA, Noriyo* ISHIBASHI, Naoko** IIDA, Megumi***

摘 要

本稿は、「戸外アートコーナー」を中心とした制作活動を通して、①子どもの自発的な表現を促す環境構成のあり方、②子ども主導の制作活動を展開するための教師の援助方法、の2点を検討したものである。具体的には、「戸外アートコーナー」で活動中の子どもの素材選定の様子や言葉、制作過程を1年間にわたり記録し、その有効性を検証した。また、自由保育の中で制作表現活動を積極的に取り入れている保育園に取材し、そのエッセンスを吸収した。その結果、子どもの自発的な表現を促すためには、子どもが自由自在に使える時間と素材と場所を十分に確保すること。教師も子どもと共に活動を楽しみ、話し合いや対話を大切にしながら、個と発達段階に配慮した援助をおこなうこと。教師間の連携を密にし、指導力を高め合うこと。以上3点を中核とする種々の知見を得ることができた。

キーワード：幼稚園、戸外アートコーナー、制作活動、表現意欲、教師間の連携

Key words : kindergarten, outdoor art corner, production activities, expression will, cooperation between the teaching staff member

1. 問題の所在と目的

磯部(2015)が「『表す』ということは人間が生活し生きる営みのなかにある生得的な一部であり、人間にとって本質的な行為としてとらえる」と述べているように、表現活動(遊び)は、子どもが子どもとして存在し、自己を認識し、学び育っていくために、欠くことのできないものである。「幼児は、生活の中で様々なものから刺激を受け、敏感に反応し、諸感覚を働かせてそのものを素朴に受け止め、気付いて楽しんだり、その中にある面白さや不思議さなどを感じて楽しんだりする。そして、このような体験を繰り返す中で気付いたり、感じたりする感覚が磨かれ、豊かな感性が養われていく(幼稚園教育要領, 2018)」のであり、「子どもの『自発的な学び』を発展させていくための手段や作用としてアートの力が発揮される(磯部, 2015)」のである。

しかしながら、園内で幼児が表現活動を行う場合、あらかじめ教師が表現活動に必要な材料を用意し、技法等を教えてから活動を開始することが多い。そして、その結果としての制作物の出来の良し悪しで、活動全体を評価しがちである。また、子どもの中に「描きたい（作りたい）」という思いが芽生えるのを待って表現活動へと導くことは少なく、教師が制作物のテーマを提案し、教師主導の活動に終始してしまいがちである。梶山女学園大学附属幼稚園（以下、梶山幼稚園）における表現活動も例外ではなく、これまで改善策を模索してきた。

その活路の一つとなったのが、平成27年度に梶山女学園大学教育学部との共同研究として学園より研究費助成金を受け、オーストラリア連邦ニューサウスウェールズ州シドニー市にある A Preschool で行った参与観察であった。その園ではアートを中心とした自由保育が実践されていて、①いつでも表現活動ができるコーナーが至るところに常設されていること、②レッジョ・エミリア・アプローチ^{註1}の影響を受け、「アトリエスタ」という役割を担う芸術教員が中心となって表現活動をすすめていることの2点を学ぶことができた（山田他，2015）。そして、これらに着想を得て、帰国後「戸外アートコーナー」の設置と実践を試験的に開始（平成27年10月）し、「身近な自然に触れながら、感じたこと、刺激を受けたことを自由にありのままに表現できる場」として設定した。

それから平成28年度まで、1年半ほどの「戸外アートコーナー」実践の蓄積の中で、子どもたちは自ら進んで活動に取り組み、いきいきとした表情を示すようになった。一斉活動で制作に取り組む表情とは、明らかに異なっていて、「戸外アートコーナー」が子どもの制作意欲を育てる一助となっていることが推察された。教師は、子どもたちの喜び、楽しむその姿から、本園が求めている子ども像を見ることができた。しかしその一方で、適切な設置場所の選定、準備と片付けの人員確保、教員間の連携方法など、さまざまな課題が浮かび上がってきた。さらに平成29年度の幼稚園教育要領の改訂に伴い、「戸外アートコーナー」での活動を年間指導計画に明記するに至ったものの、「戸外アートコーナー」の位置づけや効果的な運用方法について、各々の教員の理解や考え方に相違と温度差があることが顕在化してきた。

そこで、平成29年度は、「戸外アートコーナー」で展開される表現活動の様相を全教員で共有し、その有効な設置方法や運営方法、子ども主導の制作活動を促す指導方法について検討することとした。本実践はその報告である。具体的には、「戸外アートコーナー」で活動中の子どもの素材選定の様子や言葉、制作過程を丁寧に記録・データ化し、その有効性を検証した。また、自由保育の中で制作表現活動を積極的に取り入れている国内の保育園・幼稚園に取材し、その保育内容・実践方法などについて資料を収集した。それらを踏まえ、今後の子ども主導の制作活動への視座を得たいと考える。

註1：レッジョ・エミリア・アプローチとは、北イタリアの都市レッジョ・エミリアで実践されて

いる幼児教育で、その特徴は以下の4点である（カンチェーミ・秋田，2018）。

- ①「アトリエスタ（美術専門家）」と「ペタゴジスタ（教育専門家）」というスタッフが配置され、専門性を発揮している。「アトリエスタ」が活動の中心を担う「アトリエ」という空間が用意されている。
- ②活動のプロセス（子どもが発した言葉、様子、保育者とのやりとりなど）を記録した「ドキュメンテーション」を作成し、保護者や地域を対象に情報発信している。
- ③子どもの興味や関心を長期間に渡って、保育者もチームの一員として子どもと対話しながら進めていく「プロジェクト活動」がある。
- ④保護者も保育者も子どもも対等な立場とされ、保護者は保育の中で重要な要素と位置付けられており、様々な活動への参加が期待されている。

2. 「戸外アートコーナー」を中心とした制作活動の実践（平成29年度）

(1) 「戸外アートコーナー」を中心とした制作活動実践のねらい

幼児が自発的な表現活動を行うとき、まず全身に様々な刺激を受け、諸感覚を働かせて、「感じ取る」姿がある。この「感じ取った」ことやものと「あらわしたい」という欲求が結びつき、イメージがつくられ広がっていく。「感じてあらわす」という体験を繰り返す中で、気付いたり感じたりする感覚が磨かれ、豊かな感性が育まれる。幼児の自発的な表現活動を促す保育の在り方を探り、表現することを心から楽しむことができる幼児を育てたい。

そこで本実践では、「戸外アートコーナー」を中心とした1年間の制作活動を通して、①身近な自然に触れながら、感じたこと、刺激を受けたことを自由にありのままに表現できる環境をどのように構成していけばよいか。②幼児が感じ取った思いに共感し、イメージを広げ、豊かな感性を育むのに、教師に求められる具体的な援助とはどのようなものか。以上の2点を検討したい。

(2) 制作活動の実践方法

平成29年度の年中児（中村規代担当）と年長児（山田祥世担当）を対象に、図1に示す場所に「戸外アートコーナー」を設置した。そこでは、自由な制作活動を保障するために、大きな紙（ロール紙、B1判紙）、和紙、絵具、インク、はさみ、紐など様々な素材を常備した。季節による樹木の状況等に配慮し、平成29年度年長児の主な設置場所を次のように計画した。1学期は桜の木の下、2学期はアラカシの木の下とイチョウの木の下に設置した。3学期は、寒冷の戸外での制作活動が幼児にとって望ましくないとの判断から、計画していない。しかし、気温が15度近くある場合や、積雪時に防寒具の装着が適切に行われている場合には、戸外ですぐ活動できるように用具の準備しておく。子ども達が感じたことをすぐに表現でき、心ゆくまで味わうことができるような環境を年間通して整えていくことを目指した。教師は、幼児が感じ取ったことを表現しようとする思いが育つように、受容と共感の援助を心がけた。

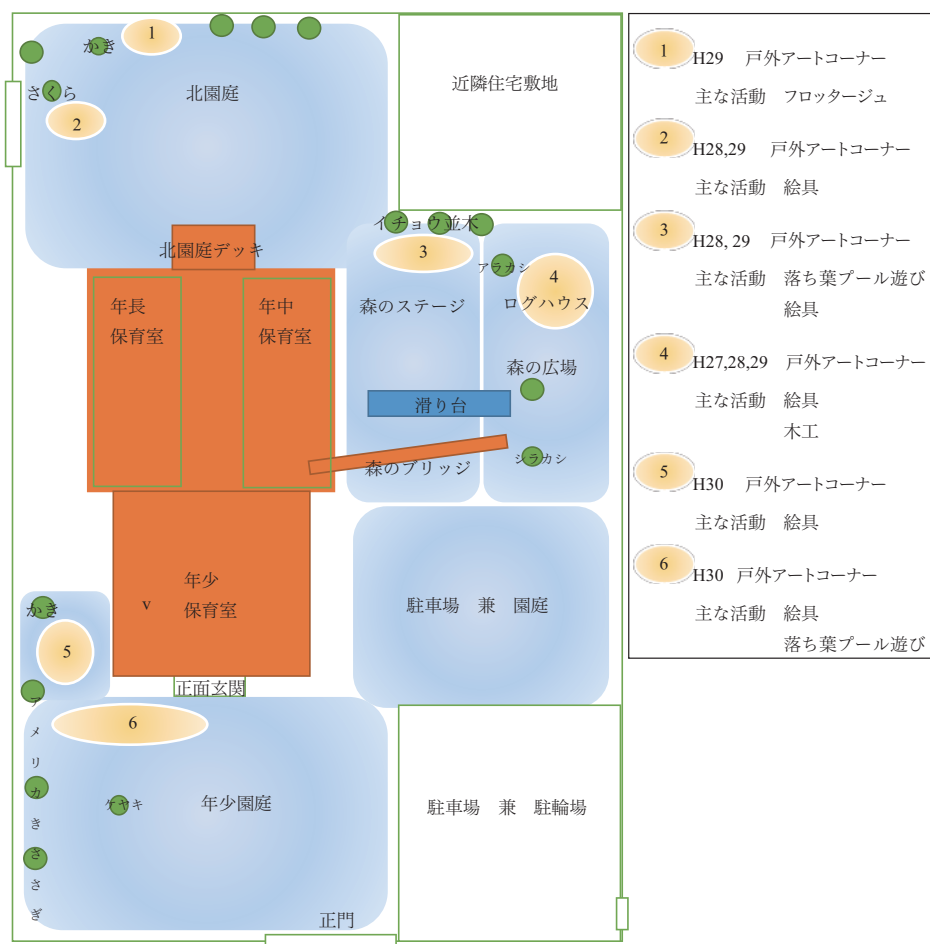


図1 「戸外アートコーナー」の設置場

(3) 平成29年度1学期の実践記録と振り返り

【実践の記録】平成29年4月上旬、桜の木の下に「戸外アートコーナー」を設置した。そこに、B1判模造紙をぶら下げ、絵具を準備した。いつでも自由に描くことができるような環境を整えた。設置当初は、年中児も年長児も、色を混ぜる行為そのものを楽しんだり、手のひらに塗っては手形を付けたり、机にこぼれた絵具を筆でぐちゃぐちゃにするなど、感覚的な遊びとして楽しむ姿がみられた。教師は感覚的な遊びを十分に味わうことができるよう、その姿を認めて見守った。

同様の状況が数日続いたので、絵具の準備方法を工夫した。当初は12色の固形絵具を準備していたが、ボトルに入れた4色の絵具（赤、青、黄、白）に変えて、パレットと筆洗い、色の絵本を添えた。すると、赤と青を混ぜると紫になることを発見する幼児が現れた。その姿に刺激を受けた幼児の中から、パレットに自分で好きな色を作る「色まぜ遊び」が始まり、それで紙に描く姿も見られるようになった。図2に示す制作物は、年長女児が「私は白と赤の絵具を混ぜてピンク色をつくるね」と会話

しながら色を混ぜている最中に、筆から滴り落ちた絵具が紙にポトリと落ち、「さくらの花びらの雨だ!」「ほんとだ!」と歓喜の声が上がるとともに、それに刺激を受けた周囲の女児たちが思い思いに描き足して完成させた作品である。そこで、教師も幼児の中に入って筆を振って絵具の滴を垂らすと、それを真似る姿が広がっていった。

【実践からわかったこと】 絵具を自由に使用することと感覚的に遊ぶことを保障したことで、自らつくりだす喜びと意欲が生まれ、上述の「さくらの花びらの雨」のような感性の育ちへとつながったのではないだろうか。素材と感覚的に遊んでいる姿を認め、共感することが、子ども主導の表現活動を援助する上で非常に重要であることを学んだ。

「戸外アートコーナー」での「色まぜ遊び」は、その後、5月の「色水遊び」(図3)、6月の「マーブリング遊び」、7月の「ボディーパーペインティング遊び」(図4)へと、形を変えながら継続されていった。しかしながら、マーブリング遊びが教育実習生の実践から始まったように、教師誘導の活動の側面は否めず、また「戸外アートコーナー」から離れた場所での活動となる日もあった。

また1学期当初、新しい友だちや環境に馴染めず、遊びに十全には参加できない年長児が「戸外アートコーナー」を繰り返し訪れていた。その子は、制作活動そのものへの興味も示してはいたが、徐々にその場に集った友だちに声をかけるようになり、関係づくりをしようとしている姿を見せてくれた。「戸外アートコーナー」が、友だち関係を広げる場としての役割を果たしていることが推察された。

【1学期の実践の振り返り】 1学期は、紙と絵具をさくらの木の下に準備し、表現したいときに表現できるような環境を整えた。しかしながら、今回の年長児は前年度、絵具に触れる機会が少なかったため、子どもたちの活動は、体や手の平に絵具を塗るといった感覚的な遊びとして楽しむ姿に止まり、教師は絵具が付いた衣服の着脱や片付けに追われ、翌日の環境構成の改善策を探ることが精一杯という状況であった。

この現状について教師間で協議したところ、今回の年中児のアートコーナーの活動に、3色(赤、青、黄)の絵具が入った水溶液を混ぜる遊びを取り入れることにした。その他に、1学期は、①年中児・年長児であっても環境の変化や教師や友だちとの関係も構築できておらず、不安定になりやすい。②教師も幼児も「戸外アートコーナー」に馴染みがなく、経験不足なので終始片付けや準備に追われるのは仕方ない。③そういった条件の中でも、子どもが感じ取る瞬間はある。以上3点を確認するとともに、子どもとの直接的なかわりを大事にするべき1学期に、環境構成と素材選びにばかり留意してしまい、子どもへの適切な援助が不足していたことを反省した。加えて、教師間連携不足も課題として浮かびあがった。

(4) 2学期の実践記録と振り返り

【2学期の実践のねらいと実践のポイント】 1学期の反省点を踏まえ、「子どもが感じ



図2 「あ！桜の花びらみたい！」



図3 色水遊び



図4 ボディーペインティング遊び



図5 ドールハウス遊び



図6 芋掘りの絵



図7 「これをお布団につかったら？」



図8 地面の紙へ絵の具飛ばし



図9 吊るされた和紙へ絵の具飛ばし

取った思いに共感し、イメージを広げるには具体的にどのような援助が必要か」を2学期の実践のねらいとした。

2学期は、1学期の活動経験から「戸外アートコーナー」での制作活動の発展が期待される反面、運動会や作品展といった大きな行事への取り組みにより、利用の機会が減少してしまうことが予測された。そこで、年中児と年長児との園庭共同利用並びに教師間の一層の連携を図り、幼児が表現しようと思った瞬間を逃さないような場所の確保と援助を心がけることとした。

具体的な活動としては、アラカシとコナラの木の下で木工制作ができるようにする(10月)。芋掘り後にロール紙を園庭に置き、絵具で自由に描くことができるような機会を設ける(11月)。イチヨウの木の下で落ち葉プールを楽しめるようにし、そこでも制作ができるようにする(12月)。

具体的な教師の援助としては、①教師も一緒に体験し、スキンシップを通して子どもの気持ちに共感する。②うまく表現できないときは、気持ちを代弁したり、頭の中の整理ができるような言葉をかけたりする。③友だちの思いに気づき、刺激を受けることができるように仲立ちをする。④表現したい思いが芽生えたのを見逃さず、その時の気持ちを思い出すことができるような言葉をかける。⑤手法や出来栄にこだわることなく、自発的に取り組む姿を認めていく。⑥教師自身が制作活動を楽しむ。この6点を軸にしてすすめる。それに加え、「表現することが楽しい」と感じることができるようなかかわり、援助とはいかなるものかを、2学期の実践のポイントとして探求していく。

【2学期の実践記録】 9月下旬から10月中旬は天候不順が続き、アラカシとコナラの木の下での木工制作は見直しを余儀なくされ、室内での木工制作へと計画を変更した。この頃室内で盛んに繰り広げられていた「ドールハウス遊び(80cm四方のスペースに家を造る)」に、「戸外アートコーナー」で使用予定であった木の板、木の切り端、木の実、小枝、ドライフラワー、布などの材料を自由に使うことが可能とし、表現の深まりを目指した。その結果、以下のような子どもの姿が見られた。

〈ドールハウスの2階も作りたい!〉平成29年9月28日。ドールハウス遊び導入当初(6月下旬)から参加していたA児とB児が1階部分の部屋や家具などを作り上げると、「2階も作りたい!」と更に意欲的に取り組み始めた。しかし、どうやって2階を作ったらいいのかわからず戸惑っていた。C児が壁を作ったところに2階の床になる板を置くと、偶然にもイメージ通りの2階になったので、遊びに参加していた子どもたちは「できた!」と大喜びした。ところが、厚みが0.5mmの板を利用して作った壁では、2階部分の床板の重みを支えることができず、すぐに崩れてしまう。A児B児C児が粘り強く作り直すが、一向にうまくいかない。教師が「困ったね。どうしようか」と尋ねると、3人は黙り込んでしまった。そこで、周囲の子どもたちに向かって「みんなはどうしたいの?」尋ねると、少し黙って考えた後にA児が「床をしっかりと支えて強くしたい」と応えた。それを聞いたB児は「(床が)しっかりとし

ないところに椅子とかベッドとかおけないもんね」と発言。何から作ったらいいのか、段取りがわかっている様子が窺えたので、教師は「いろいろと作りたいけど、どんどん重くなって崩れると思っているのね。だから床をしっかりと頑丈にしたいのね」と言葉をかけた。すると、C児が「戸外アートコーナー」に用意されていた1本の棒を使って支えようとした。その場面を見逃さず教師が「C君、それ（その棒）でどうするつもり？」と尋ねると、C児は「床と床の間に入れてみようと思って」と応えた。「いい考えだね。」と教師が発言すると同時に、A児もB児も2階の床を1本の棒で支えることが可能であると予測したのか、「C君すごい!! いい考え!」と手を叩き合ってはしゃぎ始めた(図5)。

〈芋掘り：みんなで掘ってみんなで描いた芋〉平成29年11月7日。園内にある芋畑で、蔓をみんなで綱引きのように引っ張って、ごろごろとたくさんの芋を掘り出した。それと並行して、園庭に15m程の長さのロール紙を広げ、5色(赤、青、黄、紫、緑)の絵具とパレットを利用しておいた(図6)。事前に「長い紙を園庭に広げておくから、何か面白いものを描いてみようね」と声をかけてはいたものの、具体的に何を描くのかは子どもたちに委ねた。長い紙を見て「すごいねえ」「何を描くの?」と、芋掘りを終えた子どもが集まって来た。そしてごく自然に、3～4人の子どもが紫色の絵具を選択して芋の絵を描き始めた。すると他の子どもも次々に絵筆を取って、15mのロール紙横一列に、ぐいぐい芋を描き始めた。芋と芋を緑色の絵具でつなげて蔓を描き始める子が出ると、緑色の線をぐんぐん伸ばして、みんなで引っ張った蔓の長さや喜びを表現する子も出てきた。そのような中でH児は、「混ぜて紫色を作ろう」と赤と青の絵具の配合を自分なりに工夫し始めた。その様子を食い入るように見ているI児に、「I君は、どうしたいの?」と教師が尋ねると、I児はしばらくじっと考えてから「本物みたいな紫色が作りたい」と応えた。教師が「H君にどうやって作るのか聞いてみようか」と言葉をかけると、H児も快く作り方を教えてくれて、I児はH児と一緒に本物の芋の色づくりに挑戦し、自分の色の芋を描きあげた。長くつながっている蔓の下には、たくさん収穫できた芋たち。その上に、収穫している自分を描く子どもたち。「たくさん穫れたねえ」と会話を楽しみながら描く姿があった。

【実践からわかったこと】ドールハウスの事例は、「戸外アートコーナー」そのものの効果を示すものではないが、「表現したいときに表現できるような(表現に必要な材料や素材がすぐに手に入る)環境」を、「戸外アートコーナー」に準備してきたことから派生した制作活動の高まりとして評価できるのではないだろうか。

芋掘りの事例では、「表現したいときに表現できる」というタイミングの重要性に気づかされる。これも、「戸外アートコーナー」で大事にしていることである。

イチヨウの木の下での落ち葉プール遊びと制作活動では、年中児が主役であった。図7は、イチヨウの落ち葉をベッドに見立てて遊ぶ年中女児の姿である。図8は、年中男児に年長男児が数人加わった「絵具飛ばし遊び」の様子である。仕上りの上手下手

がわかるような一斉活動での制作にはあまり興味を示さない男児が、地面に置いた紙への絵具飛ばしから、吊るされた和紙への絵具飛ばしに参加するようになった（図9）。

【2学期の実践の振り返りと残された課題】 上述したドールハウス遊びの実践では、「表現を楽しむ時間の十分な確保」を長期間にわたって保障した。また、活動が継続している間、制作物をそのままにしておける場所の確保も行った。時間と場所を保障したことで、子どもだけでなく、教師もゆとりをもって子どもの育ちに寄り添い導くことができた。その結果、ドールハウス遊びがマリオカート（車レース迷路）作りに広がり、園内に落ちているドングリに関心を示すところまで繋がり、発展していった。

芋掘りと描画の実践では、長い蔓を持って芋を引っ張る手ごたえを感じる経験の直後に、15mの表現空間に出会わせたことで、子どもは感じ取った思いをタイムリーに、伸び伸びと表現できたのではないかと考える。経験したことをすぐに表現できる場所を用意するという環境設定の工夫が、大いに活かされた結果だと言えよう。その他にも、1学期に大切にしたい、絵具そのものに親しみ感覚的に遊んだ経験が、紫色を作り出すという学びに活かさせたこともわかった。

さらに、イチヨウの木の下での実践も含め、活動中の子どもたちの表情は、実に晴れやかでいきいきしていて、楽しい気持ちが満ち溢れていた。教師は子どもの「やりたい」という主体的な思いを受け止め、「あなたはどうしたいの？」と活動を促す言葉かけをしたことで、子どもの考えや思いがそのまま教師の胸に響いてくる感覚を味わうことができた。そういった子どもと対等な関係性の中で、活動を共に楽しむ教師の姿勢が「幼児主導の制作活動」を支えていると実感した。

残された課題としては、「戸外アートコーナー」における年中児と年長児のかかわりの弱さが指摘できよう。本年度も年中児と年長児は、1学期から仲良しクラス・仲良しペアといった仕組みの中で、さまざまな場面で交流の機会を経験してきていて、10月以降には両者のかかわりはずいぶんと増え、お互いのことが分かり合えて来ているようである。しかしながら、昨年度の年長児と年中児の間に見られた「戸外アートコーナー」の学び合いの場としての活用が、本年度はほとんど見られなかった。その違いを生み出したのは、いかなる理由であろうか。「戸外アートコーナー」で育みたい子どもたちの育ち、という根本的な課題に立ち帰り検討する必要がある。

実践を蓄積すればするほど、「戸外アートコーナー」に対する自己の理解とかかわり方が問われているように感じる。「戸外アートコーナー」に対する教師間の認識と連携についても、まだ充分な一致点を見出していない。今後の課題として受け止めたい。

3. 「子ども主導の表現活動」実施園への訪問調査

(1) 訪問調査の目的

慈光福祉会すみれ保育園は、長崎県佐世保市に位置する園児数70名の中規模園で

ある。浄土真宗の教えをもとに、園児も保育者も「ともに生き、ともに育ちあう保育」が目指されている。すみれ保育園では、園児のいのちの発露である表現活動が重視されていて、ダイナミックな制作活動が高く評価されている。日常の保育の中に制作活動を積極的に取り入れている同園に取材し、その保育内容・実践方法などについての資料を収集するとともに、梶山幼稚園の制作活動の改善に資する保育の在り方を探りたい。訪問日は、平成29年11月30日～12月1日の2日間。訪問調査者は、中村規代・山田祥世・石橋尚子（当時、梶山女学園大学附属幼稚園長：横尾尚子）の3名であった。

(2) 当日の制作活動の様子と保育実践から学んだこと

訪問時は、平成29年12月10日の作品展（成道会）に向けた制作活動への取り組みの最中であった。当年は、3歳～5歳までの幼児クラスが縦割りで制作に取り組んでいるようで、成道会（お釈迦様が悟りを開かれた記念の法会：本来は12月8日）にちなんだ「象・インドのお城・ワニ」をテーマにした大型造形物の制作活動が展開されていた。ホワイトボードには、その日の予定制作工程が書き出されていて、保育士の指導目標も設定されていた。各制作工程は区切りの良い所で完結するように配慮されていて、子どもたちは工程毎に達成感を味わいつつ、次の活動のイメージ化を図ることができるようであった。制作に使う用紙が不要になったコピー用紙の裏紙であったり、大胆な色塗りや糊付けを可能にする刷毛が使用されていたり、舐めても大丈夫な小麦粉の水溶き糊であったりと、すぐに活用できる保育の知恵があふれていた。そして何より、縦割りでの制作活動を通した子ども間の連携、教師も活動の一員としてかかわっている対等な姿が印象的であった。話し合いや対話を大切にしながら、子どもたちの力で制作活動が突き進められていく姿には、レジジョ・エミリア・アプローチの「プロジェクト活動」に通じるものを感じた。

制作活動の柱はもう一つあって、子どもたちのごっこ遊びから着想を得た「すみれのまち」という商店街がすでに保育室いっぱいにできあがっていた。この取り組みでは、店の枠組みづくりや看板制作を3学年合同で行い、細かい商品の制作などは各学年で行うことができるようバランスよく計画されていて、発達段階を踏まえた育ちへの配慮を垣間見ることができた。昼食後には、「すみれのまち」でお店屋さんごっこを始める子も多くいて、作品展に向けた制作物が「作って見せる」だけのものではなくて、「作って遊ぶもの」として活用されていることに驚いた。子どもたちは、遊ぶために楽しみながら作り、それで遊び、満足できるので、「壊す日」も心置きなく大胆に壊せるということであった。

1歳児のクラスでは、保育室内で絵具遊びが始まっていた。床全体に段ボールを敷き詰め、裸足になって絵具を使う姿は、実に豪快で楽しそうであった。子どもたちは、チューブから絵具を惜しみなく絞り出し、刷毛、スポンジ、手、指でまずは自分の手や足に、身体じゅうに、それから床や壁にまで、思うがままに塗り広げていっ

た。保育士も身体じゅう絵具だらけになりながら、子どもたちと一緒に絵具の感触を味わっている様子であった。絵具が塗り広げられた段ボールの床に、ブルーシートをかぶせた上で昼食を食べていたのには、ただただ驚くばかりであった。1歳児の頃からこのように大胆な絵具遊びをしているからこそ、幼児たちの巧みな絵具の扱い方とダイナミックな表現が可能となっているのだらうと推察した。必要な時期に必要な体験を取り入れ、それを次の学年へとつなげていく、連続性のある表現教育の重要性を学ぶ思いであった。

その他にも、日々の保育の中で生み出された自然物（ドングリ等）を活かした制作物、楽器、絵画制作などが、園内外に所せましと展示され始めていて、ワクワクするようなアート空間と雰囲気が醸成されつつあった。

子どもたちの主体的な制作活動を引き出すために、すみれ保育園の保育士は、①テーマは生活（興味）に密着していることを選ぶこと。②遊ぶことをイメージして等身大のものを作ることができるようにすること。③本物を使う経験を積み重ねること。④保育士自身が固定概念を外し楽しんで活動すること。この4点を重視していた。その中の①を取り入れることは比較的容易であるが、②と③に関しては場所と時間と人手を要する。すみれ保育園の作品展では、保育室一室を町に見立て、屋台のような骨組みをベニヤ板で作り、等身大の子どもが本物のお店屋さんを体験できるようにしていた。これは、簡単に真似できるようなことではない。しかしながら、②や③を教師が意識して取り組むことで子どもの制作意欲が増すことは、すみれ保育園の子どもたちの姿から明らかであった。今後の課題として捉えたい。④に関しては、今回の訪問調査を通して、我々自身の制作活動における固定観念が一掃されたように感じている。すみれ保育園の保育士は、出来栄よりも子どもが満足して取り組むことを一番に望んでいた。子どもが満足して活動に取り組むことは、制作活動をダイナミックなものにしていった。また、すみれ保育園の保育士には、子どもの育ちに必要な働きかけが何であるのかが明確に意識されていて、優先順位がはっきりとしていた。そういったブレのない大胆さが新鮮であり、梶山幼稚園には欠けているのではないかと考えさせられた。

2日間連続で訪問してみて、一日の保育の中に、子どもが達成感を感じられるような工夫と保育士の働きかけがあることがわかった。これらは、保育士間での綿密な話し合いの成果であることが、保育後の保育士との懇談で明らかとなった。合同作品を作る過程では、たくさんの保育士が、いろいろな視点で意見を出し合う。もっとできるのではないかと、という保育士側の欲が出てくる前にブレーキをかけ合い、子どもの満足感を損なわない絶妙なところで完成品とするそうである。お互いの考えを認め合う保育士の関係性が、制作活動のねらいである「イメージを共有して、一緒に作る楽しさを味わう」の一助になっていることがわかった。学年を越えて一緒に制作活動に取り組むこと。「戸外アートコーナー」の充実に欠かせない教師間の連携のヒケツの一つが、ここにありそうである。

すみれ保育園は幼児17人に保育士2名の体制で、手厚い人員配置であった。また国内とはいえ、置かれている環境や文化には相違点も多かった。しかしながら、保育士の考え方に耳を傾けると、保育に携わる者としての願いや方向性には違いがないことがわかり、意を強くする思いであった。

さまざまな相違点と共通点。保育の工夫や子どもへのかかわり方、力の入れ所。子どもの表現の無限の可能性。今回の訪問調査を通して、梶山幼稚園を俯瞰してみることができるようになった。いつの間にか身に付けてしまっていた固定概念が外れる快感を味わうこともできた。研修報告では伝えきれないこの感覚を、梶山幼稚園の多くの教師に体験してほしい。保育改善の近道が、そこにあるように思える。

4. 実践のまとめと今後の展開

今回の実践で見られた子どもの制作活動の変化と指導の留意点を、年長児を中心にまとめると以下のようであった。

実践開始の1学期は、まず表現したいときに表現できるような環境づくりを考え、B1判紙と絵具をさくらの木の下に準備したが、年中児の間に絵具に触れる機会を十分に持てなかった年長児は、絵具を体や手の平に塗るといった感覚的な遊びとして楽しむに留まった。そこで2学期以降は、「表現活動を楽しむ時間の十分な保障」の方針は堅持しつつ、①アラカシとコナラの木の下で、落ちてきたドングリや松ぼっくりを利用して木工制作が自由にできるようにする。②芋掘り体験の直後にロール紙を園庭に置き、絵具で自由に描くことができるような機会を設ける。③イチヨウの木の下で落ち葉プール遊びを楽しめるようにし、そこでも制作ができるようにする。というように活動に広がりを持たせた。その結果、年長児のみならず年中児も、ゆつたりと対象と向き合い、感じ取った思いをその場で、そのままに表現できる喜びを味わう姿があった。それを、制作物と実践記録から読み取ることができた。

1学期は、教師にとっても「戸外アートコーナー」への馴染みに乏しく、経験不足もあって終始片付けや準備に追われ、翌日の環境構成の改善策を探ることが精一杯という状況であった。それでは子どもの表現意欲を引き出すことができないと考え、2学期以降は子どもと一緒に制作活動に参加し、①子どもがわかったことや考えて上手にできたことを迅速にキャッチして言葉をかける。②子どもが上手く表現できなくて困っている時は、その過程で子どもが感じている思いに寄り添い、それを引き出したり、代弁したりして、頭の中の整理ができるような言葉かけをする。③友だちから刺激を受けることができるように、友だちと一緒に作る楽しさも味わえるようにする。といった点に留意し、働きかけた。その結果、指導にゆとりが生まれ、子どもの発言や言葉にならない思いに気付けるようになり、教師自身も活動を楽しめるようになった。これらは、佐世保市のすみれ保育園における実践との共通点が多く、今後の「戸外アートコーナー」を中心とした表現活動の指導の方向性を考える上で、有効である

と考える。

以上のような結果を踏まえ、「戸外アートコーナー」の更なる充実と教師の指導力の向上を目指すための改善点として、以下の3点を提案したい。

①「戸外アートコーナー」の設置意義を再確認する。「戸外アートコーナー」は、ただあることに価値がある。そこで何かをやらせようとか、何らかの成果を出したいと考えることから離れ、そこに集まる子どもたちの心の動きを大切にする。活動内容ばかりに目を奪われることなく、子ども一人ひとりに合わせた援助・言葉かけが行えているか、その吟味を怠らない。

②「戸外アートコーナー」と屋内外の「制作コーナー」との連続性、相互補完性に注目して、ダイナミックな運用を図る。制作活動の内容によっては、子どもたちが戸外と屋内の制作コーナーを行き来しながらイメージを膨らませていくことがある。「戸外アートコーナー」での「感じてあらわす」ことの芽生えを、「制作コーナー」でさらに試し、深め、広げようとする子どもの姿が見られる。コーナー間の連携指導によるダイナミックな運用を目指す。

③シドニー市の A Preschool の教育者やすみれ保育園の保育士が重視していた「学びのプロセスを大切にする」という意識を持つ。そのためには、「たっぷりとした時間と場所」の保障と、適切な素材の提供が必要であることを共通理解する。子ども一人ひとりの制作活動のプロセスを注意深く見守り、記録し、子どもに何が育ちつつあるのかを見極めた上で、個に合った援助を行う。目新しいものや新しい表現技法などにすぐ飛びつく年中児。様子見をしながら、一旦始めるとじっくり丁寧に取り組む年長児。そういった発達段階を踏まえた環境構成と援助について、教師間で十分に話し合い、連携していきたい。

また今後も、表現活動に積極的に取り組んでいる幼稚園や保育園を訪問し、情報収集と共に実践のヒントを得ることに努めたい。それらを日々の保育実践に活用し、さらに活発で充実した「戸外アートコーナー」の設置・運営を目指したいと考える。

付 記

本研究の内容は、山田祥世が、平成29年度幼稚園教職経験者研修会「幼稚園10年研」協議資料として一部を発表した。同じく山田祥世が、平成30年度私学福祉会海外研修生としてシドニーの保育施設で研修行った結果を「研修成果報告論文」として提出したが、その中にも一部掲載されている。

謝 辞

本研究を進めるにあたり、すみれ保育園（長崎県佐世保市）園長近藤章先生はじめ諸先生には、ご多忙中の訪問見学をご快諾いただきました上に、「子ども主導の表現

活動を促す保育環境」に関する貴重な情報をご提供いただきました。ここに感謝の意を表します。本研究には、平成29年度椋山女学園研究費助成金(B)の交付を受けました。ご援助いただきました椋山女学園に感謝いたします。

■引用文献

- 磯部錦司（2015）保育の中のアート，p. 23，p. 25，小学館。
- カンチェーミ潤子・秋田喜代美（2018）GIFTS FROM THE CHILDREN 子どもたちからの贈りもの—レッジョ・エミリアの哲学に基づく保育実践—，萌文書林。
- 文部科学省（2018）幼稚園教育要領解説，p. 235。
- 山田真紀・三田郁穂・山田祥世・石橋尚子（2016）大学と附属幼稚園の共同研究の試み第一報告—シドニー市の公立幼稚園でのインターンシップとその後の展開—，椋山女学園大学教育学部紀要，9：205-218。